

学 位 論 文 題 名

企業ドメインの変革プロセスの実証研究：

知識編集のマネジメントの視点から

学位論文内容の要旨

本研究の目的は、持続的な発展を遂げているベンチャー企業および成熟期を迎えている中堅企業が更なる成長を目指してドメインを変革するプロセスを、知識編集のマネジメントという観点から実証的に明らかにすることである。

近年、ベンチャー企業とともに中小企業の意義が再認識される傾向が続いている。成熟経済においては成長志向の企業、イノベティブな企業が経済全体の活力の源泉とならざるを得ないためである。しかし、一部の例外を除いて経営学の理論的な枠組みの観点から、具体的に個別のベンチャー企業や中堅企業の成長や組織や戦略の課題を取り扱った研究は多くない。また、これまで経営学においては、知識経営と企業のドメインの問題を関連させて検討が行われてこなかった。

こうした問題意識から、本研究では、特に創業や設立の背景が異なるベンチャー企業と中堅企業との歴史的変遷について、詳細な事例研究を通して個別具体的に分析する。分析にあたり「企業におけるドメイン」と「組織における知識編集」との関係を分析するための独自の枠組みを構築し、その枠組みに従った比較事例研究を行った。特に調査にあたっては、ヒアリング、電子メールの通信記録に対する内容分析、観察調査分析、等を駆使するインテンシブな事例研究を行った。その結果として、以下のような分析結果を得ることができた。

- 1) 中小企業の創業から現在に至る環境適合プロセスは、ドメインの形成期と転換期に区分され、企業ドメイン・事業ドメイン・製品ドメインの連関において、全体としてのドメインの変革が行われることで達成される。
- 2) ドメイン変革の際の共通点として鍵となるのは、明確なドメインの定義を行い、ドメイン・ギャップを認識し、新しく異質な知識を導入することで既存の知識の編集パターンを破壊し、新しい知識編集プロセスを生み出すことにある。
- 3) ドメイン変革の遂行のステップには、企業ドメインあるいは製品ドメインのどちらかのレベルにおいてモデルとなるような知識編集の実験を行う必要がある。その実験を新しいコンテキストとして更に広げるような編集プロセスが必要となる。
- 4) 創立期に母体となった組織とは別に、他組織との共同開発などのコラボレーションや新しい関連プロジェクトや企業の創造などが有効な手段となりうる。日常的なネットワーキング活動が重要なプロジェクトの契機を呼ぶことも少なくはない。ただし、その際にはコアとなる知識の保有や応用が重要なポイントとなる。

以上のような分析結果から、本稿では今日の中小企業におけるドメインの変革プロセスを実証的に究明することができた。本研究においては、これまで十分に明らかにされてこなかった中小企業の長期的な発展プロセスを企業レベル・事業レベル・製品レベルに分類し、異なる知識が組み合わされる編集という観点から、その特徴的

なパターンを比較事例研究によって詳らかにすることができた。さらに様々な継続的な今後の研究につながる理論的および実践的含意を提示した。本稿で示された知識編集のマネジメントの観点からみる企業の変革プロセスの研究枠組みは、一般的な適用可能性を更に検討していく課題がある。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 金 井 一 頼

副 査 教 授 小 島 廣 光

副 査 助 教 授 平 本 健 太

学 位 論 文 題 名

企業ドメインの変革プロセスの実証研究：

知識編集のマネジメントの視点から

本論文は、ベンチャー型の中小企業を対象にして、企業成長とドメイン変革の関係について知識編集のマネジメントという新しい視点から解明を試みた意欲的な実証研究である。

これまで経営学の分野で企業の成長プロセス、特にベンチャー企業の成長プロセスをドメインの形成、変革と関連づけて詳細に分析した研究はほとんどない。また、近年我が国のみならず米国においてもナレッジ・マネジメントについて高い関心が持たれているが、企業ドメインの問題を知識編集の視点から検討を行っている研究は皆無に等しい。山田氏の研究は、このような未開拓の研究領域に対して既存の関連分野の諸研究を批判的に検討したうえで、知識編集のメカニズムを解明するための分析枠組みを独自に構成し、この枠組みをベースにしてベンチャー型企業の成長プロセスをドメインの形成、転換と密接に関連づけて分析を行っている。また、研究方法についても、通常ではアクセスが難しい企業の電子メールのログデータによる内容分析や参加観察を行ない、多様な研究方法を組み合わせることで実証研究を有効に実施していることも本研究の重要な特徴となっている。なお、本論文は全体で7章から構成されており、A4版で176頁にまとめられている。以下、本論文の要旨を紹介する。

《論文要旨》

第1章では、ベンチャー型企業の成長にはドメインの有効な形成と転換が必要であり、そのプロセスはすぐれて知識創造を中心としたナレッジ・マネジメントのプロセスそのものであることから、知識編集の視点からの分析が有効であるという指摘がなされ、その解明こそが本研究の課題であるとの研究目的が明確に設定されている。

第2章では、ドメイン論、知識経営論、知識編集に関する研究など既存の関連研究のレビューが行われ、これらの諸研究の貢献と課題が明らかにされている。

続く第3章では、事例研究に関する方法の検討とともに2章の既存研究のレビューを踏まえて組織の知識編集のメカニズムを解明するための分析枠組みが提出されている。この分析枠組みによると、組織の知識編集は意味形成と意思決定のプロセスから構成されることが明らかにされており、一定のコンテキストの中で組織の内外のメンバーが持つ経営知、技術知、市場知といった異質の知識がこのプロセスを通じて連結されたり、切り離されたりされることによって企業の多様なレベルのドメインが形成されたり、転換されることになるのである。

第4章では、創業型ベンチャー企業であるBUGの創業から成長までのプロセスとドメイン形成、転換に関するケーススタディが行われている。「札幌でコンピュータ関連の仕事がしたい」という動機からスタートした同社が当初単にマイコン関連の仕事という漠然とした事業イメージをベースに仕事をしていく中で、単なる技術知を越えた経営知と市場知を獲得し、「システムハウス」という事業ドメインを確立し、さらに「ソフトとハードの融合領域」というようにドメイン転換が行われ、それとともに企業の成長が実現されていることが明らかにされている。この間、理念に近い形で設定されている企業ドメインは、「エンジニアのための会社」から「成功はお互いに、共生」というように、ステーク・ホルダーを意識したものへと変化している。

第5章がスピニアウト型ベンチャー企業であるリクルート映像のケーススタディである。山田氏

は、当社がリクルートからスピナウトするうえで、「教育の情報化」というドメインの創造が大きな意義を持っていたことを指摘し、さらに「ナレッジマネジメント支援」へと企業ドメインが転換していくなかで、教育映像制作、レンタル企業からデジタルコンテンツ流通企業へと事業が転換していくプロセスを分析している。

第6章では、上記の2社のケーススタディを通じて得られた分析結果が比較検討されている。まず、創業型の企業とスピナウト型の企業ではドメイン形成のレベルとプロセスが異なり、前者では製品ドメインを核にして事業ドメインが形成されるのに対して、後者は企業ドメインの定義が先行し、それをもとに事業ドメイン、製品ドメインが定義されるというパターンをとることが明らかにされている。また転換プロセスでは、前者が企業ドメインの明確化をもとに新たな製品ドメイン、事業ドメインが定義されるのに対して、後者では製品レベルでの技術転換によって事業ドメインの変革が行われ、企業ドメインが再定義されるというパターンをとるという指摘がなされている。このことを知識編集の視点から述べると、ドメインの形成と変革において最初にどのレベルのドメインにおいて新たな知識編集のプロセスが展開されるかによって、組織全体の知識編集のパターンが異なることを意味している。

最後の第7章が結論であり、これまでの研究結果のまとめとともに研究の理論的および実践的含意が提出されている。

《論文の評価》

1 本論文は、これまで経営戦略論の分野で研究されてきた企業ドメインの創造、変革の議論をもとにベンチャー企業の成長プロセスの分析を行った実証研究であるが、これまで山田氏の研究のように緻密で詳細な研究は行われていない。このような意味で、本論文は、ベンチャー、中小企業の研究に新たな知見を加え、大きく前進させるとともに新しい研究の方向を具体的に提示している。

2 本論文はこれまでほとんど関連づけられることなく展開されてきたドメイン研究とナレッジマネジメントの研究を統合する視点を提供することによって両方の研究の前進に大きな貢献をしている。

3 本研究では面接調査のみならず、電子メールの通信記録の内容分析、参加観察など多様な研究方法が採用されており、それによってほかの研究方法では得られない知見が獲得されている。

なお、審査委員会では問題点として、第一に分析結果の一般化について限定的な表現が必要である、第二に文章表現が必ずしも明快でないところがあるので注意が必要であるとの指摘がなされた。

《結 論》

以上の所見を総合して、提出された論文は執筆者が自立した研究者として研究を展開していくことができる能力が十分にあることを示しており、よって本審査委員会は本論文を博士（経営学）の学位を授与するに値するものと判断した。